

神の御住まいとなる教会

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 2章 20～22節

- 20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。
- 21 この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、
- 22 このキリストにあつて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

【新共同訳】

- 20 使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、
- 21 キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。
- 22 キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

ベレーシート

●昨年2月の全国牧師会で、「三日目に」という聖書の根拠について取り上げました。使徒パウロが「聖書の示すとおり、三日目によみがえられたこと」(Iコリント15:4)と記していますが、なにゆえに、キリストは「三日目によみがえらなければならないのか」ということです。「三日目に」の根拠を聖書の中から論証しなければならないとするなら、その聖書の根拠はどこにあるのかという問いかけを致しました。そして、そこで私はあるなぞなぞを紹介しました。「野菜を満載した車が道路を走っていて、ある角に来て曲がろうとした時、何かを落としました。いったい何を落としましたでしょうか。」・・・答えは、「スピード」です。「野菜」ということばについ気を取られてしまうと、このなぞなぞは解けません。「三日目に」ということばも実は同様です。「三日」、あるいは「三」という数字に気を取られてしまうと、パウロの言う「**聖書の示すとおり**」という根拠が分からないのです。「三日目に」の聖書の根拠は、主が定めた主の七つの例祭の中の「**初穂の祭り**」と関係しているというのがその答えでした。イエシュアのよみがえりは「初穂としてのよみがえり」として主の例祭の中にすでに啓示されていたのです。それが「聖書の示すとおり」でした。

●今回もそのような話になるかと思えます。つまり、**聖書はヘブル的視点から読まなければならない**ということ論証するセミナーになるかと思えます。ヘブル的視点から聖書を読むならば、今までの私たちの聖書の読み方、理解の仕方が格段と変わってしまうのです。そのヘブル的視点から聖書を読むとはどういうことなのか、そのことを今回のセミナーでお話したいと思います。

●聖書箇所はエペソ人への手紙 2章 20～22節を取り上げます。20節は「あなたがた」で始まり、22節では「あなたがたもともに」となっています。「あなたがた」という呼びかけと同時に、パウロは「私たち」という言い方を繰り返し使っていますが、その場合、「私たち」とは、「ユダヤ人クリスチャン」と「異邦人クリスチャン」のことを意味しています。「あなたがた」という場合には、2章12節にあるように、①「イスラエルの国から除外され」、②「約束の契約については他国人」、③「神もない人たち」のことで、異邦人ク

リスチヤンのことを限定して使っています。ところが今や、キリストにあって、また御霊によって、ユダヤ人クリスチヤンと異邦人クリスチヤンが「ともに建てられる」ことで、神の御住まいとなるとしています。

「神の御住まい」とは、ヘブル語では「ミシュカーン・エローヒーム」(מִשְׁכָּן אֱלֹהִים)と言い、ギリシア語では「カトイケーテーリオン・トゥー・セウー」(κατοικητήριον τοῦ θεοῦ)です。「ともに建てられ」は現在形受動態で、今もなお建て上げられ続けているのです。

●聖書には教会がいかなるものであるかを示すさまざまなたとえがあります。それは、教会がひとつのたとえでは表わしきれないからです。エペソ書に限るなら、教会は、1章にある「キリストのからだ」、2章にある「神の作品」「新しいひとりの人(One New Man)」「神の家族」「神の御住まい」、6章にある「(真理のために)戦う教会」を挙げることができます。今回はその中から、「神の御住まいとなる教会」を取り上げてみたいと思います。「神の御住まいである教会」とせずに、「神の御住まいとなる教会」としたのは、それは教会が神の御住まいとなるために、今も絶えず成長を続ける必要があるからです。

●パウロは教会を「建物」にたとえています。私たちが教会と言うと、建物それ自体を想像してしまうことがあります。教会は建物ではありません。建物自体がイコール教会というわけではありません。便宜上、そう言っているにすぎません。真の教会はだれの目にも見えるというものではありません。「キリストのからだ」にしても、「あっ、キリストのからだが見える」という言い方はしません。テキストをもう一度よく見てみると、組み合わせられた建物全体が成長するというふうに表示しています。からだであれば成長するという表現は理解できますが、建物が「成長する」というのは何か変です。しかしパウロがそのように言うのは、それは私たちが考えるような建物ではないからです。常に成長するいのちある建物、生きている建物、つまり、神とともに住む場としての聖なる宮を意味しています。そこに住むのはだれでしょうか。キリストの教会の構成メンバーは、イエシュアをメシアと信じるユダヤ人と、同じくイエシュアをメシアと信じる異邦人です。このことがパウロのいう「教会」を理解する上できわめて重要なのです。

●今回のテキスト(2:20~22)から三つのことを取り上げたいと思います。第一は、「建物の基本構造とはなにか」ということ。第二は、「互いに組み合わせられるとはどういうことか」。そして第三は、「成長して神の御住まいとなるためのプロセス」についてです。

1. 建物の基本構造とはなにか

●建物の最も重要な部分はどこにあるでしょうか。イエシュアは「岩の上に自分の家を建てた賢い人」と「砂の上に自分の家を建てた愚かな人」の話をされました。建物自体を見るならばどちらもなんら変わりません。ところが、雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたとき、建物を支えている最も大切な部分が露わになりました。「岩の上に自分の家を建てた人」の家は雨が降って洪水が押し寄せてもびくともしませんが、「砂の上に自分の家を建てた人」の家はひどい倒れ方をしました。

●「岩の上に家を建てる」とは土台を深くすることです。ユダヤでは、砂地のずっと下にある深い部分まで

掘って土台を造ったのです。ですから、倒れることはありませんでした。このたとえが言わんとすることは、建物の最も大切な部分は土台にあること。その土台をイエシュアに置くことを教えているのです。私たちの信仰生活も、土台がどこに置かれているかを試されるときが必ずあります。普段は分からなくても、土台が露わにされるテストがあるということです。

●使徒パウロは、20 節で「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。」と語っています。「土台」と「礎石」とありますが、どう違うのでしょうか。新改訳は「礎石」と訳していますが、聖書によってその訳語は以下のように様々です。

- ①「かなめ石」(新共同訳)、②「隅のかしら石」(口語訳)、③「隅石」(永井訳)、④「土台石」(尾山訳)、⑤「最も重要な土台石」(L.B)・・・など。

●「礎石」とは建物の要の石として、建物を完成させる上でなくてはならない最も重要な石を意味しています。詩篇 118 篇には、この「礎石」であるイエシュアを預言している箇所があります。しかも、神がそれを私たちに与えて下さったにもかかわらず、人はその石をなんと捨ててしまったというものです。

【新改訳改訂第3版】詩篇 118 篇 22～24 節

- 22 家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。
- 23 これは【主】のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。
- 24 これは、【主】が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。



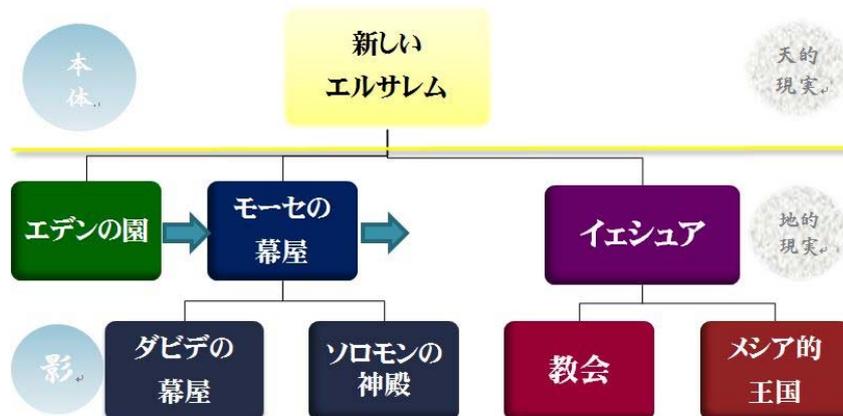
●ここで語られている「家を建てる者たちの捨てた石」とは、実は、礎の石となるべく定められたイエシュア・ハマシアッハ(イエス・キリスト)のことを預言していたのです。そんな礎の石を捨ててしまっただけでは家を建てることはできません。しかし神はその石を用いて(復活させて)、建物をしっかりと完成させる要の石とされたのです。「私たちの目には不思議なことである」とあります。

●建物の土台である「使徒と預言者」が語ったことばは、後に新約聖書として書き記されましたので、その土台は神のことばである「聖書」と言えます。しかしそれ以上にもっと重要な礎石(かしら石)がイエシュア・ハマシアッハです。イエシュアは弟子たちに「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない。」と言われました。ですから、「わたしにとどまりなさい」「わたしのことばにとどまりなさい」「わたしの愛の中にとどまりなさい」と繰り返し話されました。これはとても大切です。御子イエシュアはいつも御父にとどまっていました。いつも御父のことばにとどまっていました。いつも御父の愛の中にとどまっていました。実はこのかわりか、今日のクリスチャンにおいてとても希薄なのです。「とどまる」ということがどういうことかを尋ね求めて、それが自分のライフスタイルとして形造られる必要があります。

●パウロは 21 節で、「この方であって、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのだ」とし、22 節でも「このキリストであって、あなたがたともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのだ」としています。教会という生きた建物、成長していく建物は、聖書という土台のみならず、さらにその土台となっている礎石(かしら石)であるイエシュアによって真の教会へと建て上げられていくのです。そ

の目的は、教会が神の御住まいとなるためです。この「神の御住まい」とは、神と人とがともに住むことを意味しています。黙示録 21 章には、それが究極的な神のご計画の目的であることを啓示しています。

●神が人とともに住むという神のご計画を、神は歴史の中で以下のように目に見える形で現わして来られました。エデンの園の中にも、また、モーセの幕屋の中にも、またダビデの幕屋やソロモンの神殿の中にもです。そして最終的には「イエシュア」を通して啓示されました。イエシュアの昇天後は、教会がそのことを引き受け、キリストの再臨時に本来の「神と人とがともに住むこと」がこの地に実現します。それが千年王国における「メシア的王国」です。しかしそれも天にある本体の影(写し)でしかありません。本体とは、古いものが過ぎ去って天から下りてくる「新しいエルサレム」であり、これこそが神と人とがともに住む、永遠の神のヴィジョンです。



2. 組み合わせられ、ともに建て上げられるということ

●さて、21 節と 22 節を見てみましょう。

21 この方にあつて、組み合わせられた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、

22 このキリストにあつて、あなたがたともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

●21 節と 22 節は同じことを別の表現で表しています。使徒パウロはユダヤ人であり、同義的パラレリズムの修辞法を知っており、その達人です。21 節が 22 節で以下のように言い換えられています。

①21 節「この方にあつて」⇒ 22 節「このキリストにあつて」

②21 節「組み合わせられた建物の全体が成長し」⇒ 22 節「あなたがたともに建てられ」

③21 節「主にある聖なる宮となる」⇒ 22 節「御霊によって神の御住まいとなる」

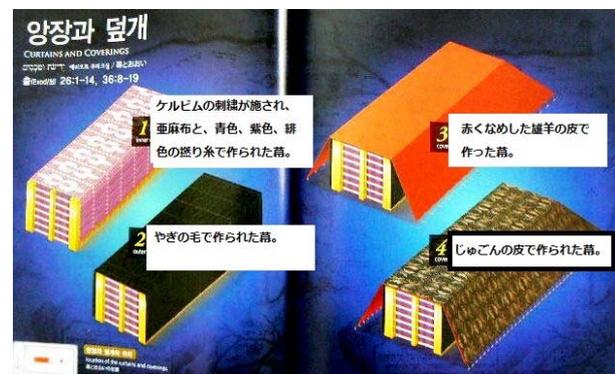
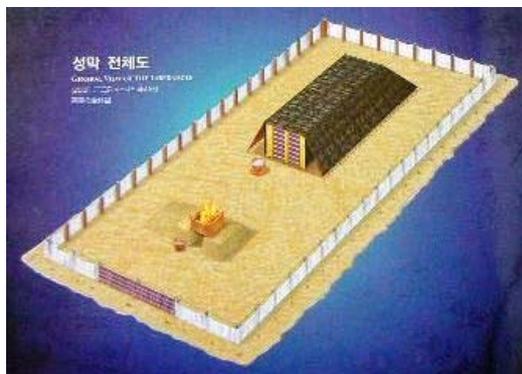
●ここで重要なことは、「私たち」(ユダヤ人)と「あなたがた」(異邦人)が「組み合わせられ」「ともに建てられる」ことなのです。そのことによって、キリストを礎石とした教会が神の御住まいとなるということです。それが「聖霊によって」可能となったことは頭では理解できますが、具体的にどういうことなのでしょう。

●「ユダヤ人」と「異邦人」が「互いに組み合わせられ(結び合わされ)、ともに建てられる」というこのヴィジョンは、実は、旧約の二つの事柄の中にすでに啓示されていました。

ひとつは、モーセの幕屋の本体をおおう四枚の幕のうちの内側の二枚の中に、

もう一つは、主の例祭の「五旬節の祭り」でささげる二つのパンに啓示されています。

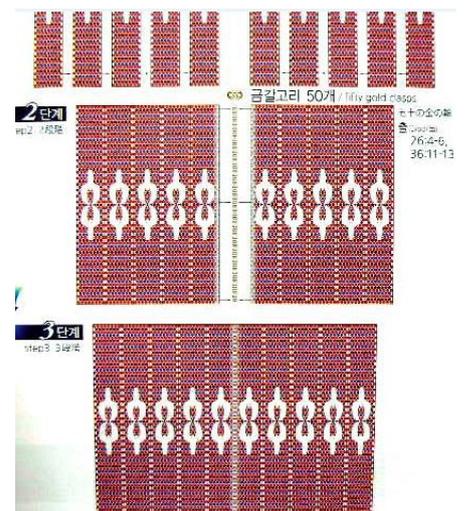
これらのことは、**聖書をヘブル的視点で読むときに神のご計画を理解することができることを示唆しています。**少々厳しい表現をするならば、ヘブル的ルーツは切り離されてはならないということです。



(1) 幕を互いにつなぎ合わせて一つの幕屋にすること

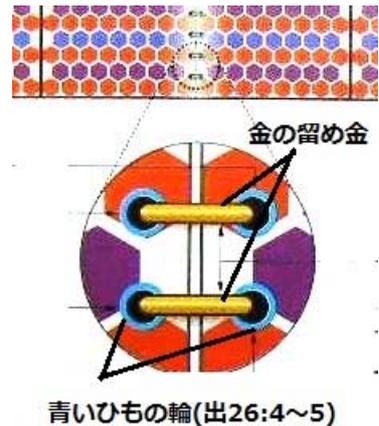
【新改訳改訂第3版】出エジプト記 26章 1~6節

- 1 幕屋を十枚の幕で造らなければならない。すなわち、撚り糸で織った亜麻布、青色、紫色、緋色の撚り糸で作る、巧みな細工でそれにケルビムを織り出さなければならない。
- 2 幕の長さは、おのおの二十八キュビト、幕の幅は、おのおの四キュビト、幕はみな同じ寸法とする。
- 3 その五枚の幕を互いにつなぎ合わせ、また他の五枚の幕も互いにつなぎ合わせなければならない。
- 4 そのつなぎ合わせたものの端にある幕の縁に青いひもの輪をつける。他のつなぎ合わせたものの端にある幕の縁にも、そのようにしなければならない。
- 5 その一枚の幕に輪五十個をつけ、他のつなぎ合わせた幕の端にも輪五十個をつけ、その輪を互いに向かい合わせにしなければならない。
- 6 金の留め金五十個を作り、その留め金で幕を互いにつなぎ合わせて一つの幕屋にする。

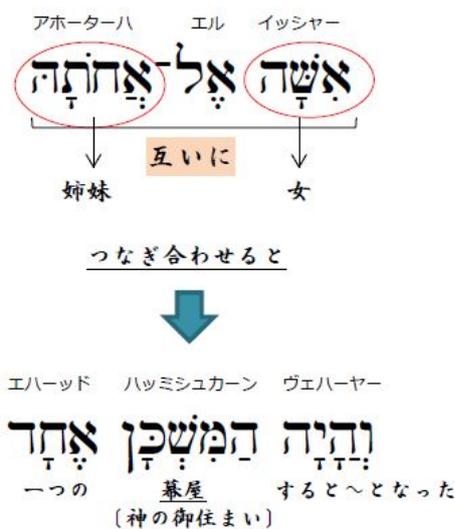


●幕屋を覆う幕は四枚です。外側の二枚は一枚の幕としてかけられますが、内側の二枚の幕はいずれも「互いにつなぎ合わせ」て造るよう、神は指示しています。なぜ、そんな手間をかけるように指示したのでしょ

うか。つなぎ合わせるためには50個の金の留め金を造り、それを通すための穴を開けなければなりません。これは大変な作業です。それをあえてさせたことに意味があるのです。幕と幕をつなぎ合わせて一枚にするための「金の留め金」には、右図のように、「青いひもの輪」があります。なぜ、青色なのでしょう。



●幕屋のすべての部分には神の隠された意図があります。青は天の色であり、この二つを結びつけるのはキリストと御霊によって可能であることが啓示されています。使徒パウロもそのように「キリストにあって」、「御霊によって」と記しているとおりです。二枚の幕は「ユダヤ人」と「異邦人」を意味しているのですが、これを結び合わせるのには、人間的な努力では不可能であることを「青いひもの輪」が象徴しているのです。また「金の留め金」はキリストの神性と力を象徴しています。この「金の留め金」と「青いひもの輪」によって、二つの幕を「互いに」つなぎ合わせて一つの幕(屋)にするのですが、この「互いに」と訳されているヘブル語を見てみると以下のようになっています。



●「イッシャー・エル・アホーターハ」(אִשָּׁה אֶל-אֲחֵתָהּ)の中にある「エル」(אֶל)は「~に向かい合つて」という意味の前置詞です。これと似た用法が創世記 32 章 31 節にあります。「パーニーム・エル・パーニーム」(פְּנִים אֶל-פְּנִים)。これで「顔と顔を合わせて」という意味になりますが、直訳は「顔・に向かい合つて・顔」です。ヤコブは「私は顔と顔とを合わせて神を見た」と言って、その所を「ペヌエル」と名づけました。他の例としては、民数記 12 章 8 節に「彼(モーセ)とは、わたしは口と口とで語り、明らかに語って、なぞで話すことはしない。」とあります。ここにある「口と口とで」の部分「ペー・エル・ペー」(פֶּה אֶל-פֶּה)です。「イッシャー・エル・アホーターハ」、「パーニーム・エル・パーニーム」、「ペー・エル・ペー」、いずれも、互いに向かい合っている状態を表しています。

●上図にあるように、女を意味する「イッシャー」(אִשָּׁה)と姉妹を意味する「アホーターハ」(אֲחֵתָהּ)という語彙の中に、やがてキリストにあつて共に組み合わされる(結び合わされる)「ユダヤ人」と「異邦人」か

らなる教会(「エックレーシア」ἐκκλησία)が啓示されていると考えることができます。ちなみに、教会は女性形です。

(2) 主の例祭の「七週の祭り」に秘められた神の啓示

●レビ記 23 章には主の例祭に関する規定が記されています。その章から、「五旬節」についての箇所を拾ってみましょう。

【新改訳改訂第 3 版】レビ記 23 章 15～17 節

- 15 あなたがたは、(過越後の)安息日の翌日から、すなわち奉献物の束を持って来た日から、満七週間が終わるまでを数える。
- 16 七回目の安息日の翌日まで五十日を数え、あなたがたは新しい穀物のささげ物を【主】にささげなければならない。
- 17 あなたがたの住まいから、奉献物としてパン——【主】への初穂として、十分の二エパの小麦粉にパン種を入れて焼かれるもの——二個を持って来なければならない。

●過越の祭りにおいては、大麦を初穂として神にささげ、しかも「種の入らないパン」を七日間食べなければならなかったのに対し、「七週の祭り」では、主への初穂として新しい小麦粉にパン種を入れて焼いたパンを二個ささげなければならないということです。なぜ、パン種が入ったものなのでしょう。また、なぜ、それを二個なのでしょう。ここに隠された神の秘密があります。**二個のパンは「ユダヤ人」と「異邦人」を意味しています。**この二つのパンに罪を象徴する「パン種」を入れたものを祭司のところに持ってくるということは、あるがままで祭司を通して神に近づくことを意味しているのです。

●ユダヤ人たちは長い間、「七週の祭り」を行ないながらも、その意味することについては覆われていました。しかし今やメシアなるイエシュアと聖霊の注ぎの賜物によって、その祭りの真意を悟ることができるようにされたのです。しかしながら、この「奥義」を聖霊に満たされた弟子たちがすぐに悟り得たかといえばそうではありません。この「奥義」が明確に啓示されたのは使徒パウロが最初でした。そして他の使徒にも漸次示されていきます。

3. 教会が成長して神の御住まいとなるためのプロセス

●このように、ユダヤ人と異邦人が「組み合わせられる」「ともに建てられる」ためには、ヘブル的ルーツを大切にする必要があります。イエシュアが語られた「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして・・・わたしの証人となります」(使徒 1:8)のみことばを、私たちは宣教的視点で理解し、聖霊の働きによって「力を受ける」ということにどうしても目を向けてしまいがちです。そのため、「五旬節(七週の祭り)」に聖霊が注がれたことによって、その祭りの啓示している事柄が成就したということには、なかなか気づかないのです。なぜでしょうか。その要因のひとつとして、伝道至上主義を挙げることができますが、それ以上に、置換神学の影響があります。その弊害は、キリスト教会がこれまでの歴史においてユ

ダヤ的なルーツを断ち切ってしまったことによるものです。2 世紀に入ると、ローマ帝国の政治的、また社会的事情により、キリスト教会内に反ユダヤ主義的傾向が入り込んできました。ローマ・カソリック教会は「新約にある信者は安息日を含め、主の例祭を祝わないように、祝う者は信者間の交わりから除名する。」との通告を出しました。この通告はキリストのからだである教会からユダヤ的ルーツを一掃することを意図するものでした。「ニカヤ公会議」(A.D.325 年)において、主催者であったローマ皇帝コンスタンティヌスは、当時のユダヤ的ルーツを継承していた教会指導者を招待しませんでした。そのために、キリスト教会は元木であったユダヤ的なものを教会から切り離して、ヘレニズム(異教)化の道に進んでしまったのです。

●このことは今日に至るまで多大な影響を与えています。それゆえ今日、再び、ユダヤ的・ヘブル的ルーツに立ち戻る必要性が叫ばれているのです。そうでなければ、神のご計画も、神のみこころも、神の御旨も神の目的も、正しく理解することができないからです。ですから、

「立ち止まり、そして、振り返る!!」

●これが、今、キリスト教会に求められていることなのではないでしょうか。かつて、神の教会改革運動は、当時の教派主義、分派主義の弊害に気づいて、聖書に立ち返り、「神の教会」の理念のために戦いました。私たちがそこに立つべきだと信じます。エペソ人への手紙 2 章 21~22 節に記されているように、教会がユダヤ的ルーツを教会の中に保ちつつ、つなぎ合わせて行くことで、神のご計画に参加していく道に導かれようとしています。モーセの幕屋の中に、また主の例祭の中に神のご計画のマスタープランが啓示されているとすれば、それに対して、私たちは真摯に向き合うことが不可欠です。

21 この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、

22 このキリストにあつて、あなたがたとともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

●上記のパウロのことばを、正しく偏見なく理解する必要があります。ヘブル的ルーツを欠いた聖書解釈は、必ずや逸脱を招きます。それどころか、逸脱していることにも気づきません。その証拠の一つは、神のご計画の成就として約束されている神のみことばを、自分たちの働きや活動のスローガンにして用いていることに見られます。このようなことは、みことば信仰と言いながらも、実は、神のことばを自分(たち)のために利用している一種の偶像礼拝です。自分としては良かれと思ってやっていることが、ますます神のご計画を見えなくしているのです。まさに、私自身がそのようなことをやって来た者の一人なのです。そのような流れの中に身を置いていると、神の永遠のご計画における神の啓示を受け取ることができず、また、大胆に、確信をもって御国の福音の希望を語れなくなります。終末に関係するさまざまな教えが混乱している昨今、その混乱の原因が反ユダヤ主義の中にあるように思われます。したがって、ヘブル的視点から聖書を読み直すことによって、神の永遠のご計画とみこころ、その御旨と目的がますます明瞭にされ、宣教の内容もパッケージ的なレベルから脱して行くと思えます。そのための創造的な力が上から与えられるように、知恵と啓示の御霊が与えられるように祈り続ける必要があります。「霊性の回復の力」はいつの時代でも、神の真理のみことばが開かれる以外にはないのだと信じます。

国内宣教委員会「霊性の回復セミナー」担当
銘形 秀則